

# 死別体験のある子どもをもつ親の生と死に対する認識

Parents with their children in bereavement: their conception toward life and death

井上 由紀子\*<sup>1</sup> 工藤 悦子\*<sup>1</sup> 岩本 喜久子\*<sup>2\*3</sup>  
岡田 洋子\*<sup>4</sup> 小林 千代\*<sup>5</sup> 荃津 智子\*<sup>6</sup>

Yukiko Inoue, Etuko Kudo, Kikuko Iwamoto,  
Yoko Okada, Tiyo Kobayashi, Tomoko Kukitsu

キーワード：親，認識，子ども，死別体験

Key words : parents, conception, children, bereavement

## 要旨

本研究は死別体験をした子どもをもつ親の体験から生と死に対する認識を明らかにした。半構成的面接ガイドを用いてグループ・インタビューを実施した。対象者は父母19名で、年齢は30～50歳代であった。死別時の子どもの年齢は5～12歳で、死別対象は祖父母、きょうだいであった。親は、【死別体験による子どもの反応への戸惑い】を感じながらも【死別体験による子どもの言動の変化】を認識し、【子どもの“死”への理解の深まりを実感】していた。一方で、親自身が大切な人を亡くした当事者であるために【子どもの悲しみを共有できなかった申しわけなさ】を感じ、自分の幼い頃の死への受け止めを想起し【子どもと自分の“死”の受けとめの相違】を感じていた。また、死別体験による子どもの言動の変化から【子どもと“死”を語り合うことの大切さ】を実感すると同時に、【バーチャルな“死”が子どもへ与える影響を危惧】し、【親同士で“死”を語り合うことの難しさ】を実感していた。生と死について日常生活の出来事から親と子どもが思いや考えを共有する意義が確認された。

---

\*1札幌保健医療大学 Sapporo University of Health Sciences

\*2Fraser Health Jim Pattison Outpatient Care & Surgery Center & Surrey Memorial Hospital, BC Canada

\*3Japan Center For Grief Education

\*4旭川医科大学医学部看護学科 Asahikawa Medical University

\*5元天使大学看護栄養学部看護学科 Formerly Tenshi College Department of Nursing

\*6天使大学看護栄養学部看護学科 Tenshi College Department of Nursing

## 1. はじめに

子どもの悲嘆（グリーフ）や悲嘆プロセスに関するものの多くは欧米での研究が中心である。欧米では、1980年代より死別体験のある子どもの悲嘆反応やそのプロセスに関する研究が進められている。Grollman, E.A.<sup>1)</sup>は、親や同胞を亡くした子どもの悲しみ、別の人も亡くすのではないかという恐怖、自らの死への恐怖など複雑で多様な反応を示すこと、また生存している親の反応によっても影響を受け自らの気持ちを表現しなくなるなどの反応があることを指摘している。Worden, J.W.<sup>2)</sup>およびSilverman, P.R.<sup>3)</sup>は死別体験をもつ子どもの悲嘆、喪失の反応とそこから回復するためのプロセスと適切なサポートの必要性を述べている。欧米では、子どもの死別による悲嘆、喪失に関する研究と同時に、早くから親などと死別した子どもへのグリーフケアが取り組まれてきた。特にアメリカのダギーセンターは、死別した子どもの支援施設として活動を始め、これをモデルとした活動が全米で展開されている。

2011年3月の東日本大震災では、約2万人の死者、行方不明者が出る大災害となり、多くの子ども達が、親やきょうだい、親戚、友人など大切な人を失った。わが国では近年、身近な大切な人と死別した子どもの悲嘆や喪失に対して関心が向けられるようになり、子どもに対する死別時の支援の必要性が語られるようになったが、大震災という悲しい経験がその支援の必要性とあり方を広く社会に浸透していく契機となったといえる。

小島<sup>4)</sup>は、2004年より親と死別した子どもの悲嘆や喪失に関して継続的に研究しており、学童期から思春期に死別体験のある大学生へのインタビュー調査では、その当時感じたこと、考えたことなどを明らかにしている。彼らは、親の死の衝撃による孤独感、自責の念、見捨てられ感、怒り等様々な思いを誰にどのように表現したらよいかわからず葛

藤していた。家族への配慮から感情を抑圧する反面、他者からの愛情や援助を求めていたと報告している。また、石井<sup>6)</sup>は、親を亡くした子どものサポートの実践を通して家族の総合的なグリーフサポートの重要性を述べている。震災後は、個人の悲嘆に寄り添うグリーフケアの観点での支援が行われるとともに、国や自治体が一丸となりグリーフサポート体制を系統的に整えていこうとする試みも出てきた。

筆者らは、看護職の立場から「子どもの死の概念発達」や「子どもへの命の教育のあり方」について検討してきた。その結果、子どもたちは身近な人やペットとの別れや死を体験はしているが、多くの子どもたちはそれらを身近な人と話す機会がないこと、一方で子どもたちは「生」と「死」に関する出来事に関心を寄せていること、年齢に対応したデス・エデュケーションの場があれば生から死へと考える力をもっていることが明らかになった<sup>8)9)10)11)</sup>。また、2007年の小学生をもつ親を対象とした調査では、親が子どもと「死」について語ることをの実態として、普段から子どもと「死」について話をすることがある親は約70%で、子どもと「死」について話すことは、幼児期から学童期いずれの年代でも80%以上が大事であると答えていた。また、子どもが身近な人と死別したときに親の91%は、死別時に子どもと死について話をしていた。親の多くは子どもと「死」について話すことに意識は低いとはいえない結果であった。しかし、30%の親が子どもと「死」について語り合う機会がないこと、あるいは、死の話はごまかしてしまうなど親自身も子どもとどのように向き合っよいか戸惑う状況が明らかとなった<sup>12)</sup>。わが国では、大人側に子どもと「死」について話すことに抵抗があると言われ、村井<sup>13)</sup>は、これらの問題を大人や教師が「死」は知の対象ではなく、「死」について考えても仕方がない」との考えがあること、2つ目に大人や教師の内面にも死へ

の恐怖があり、死について語りたがらない、語ろうとしない「死のタブー」が形成されているからであると指摘する。これら「生・死」に対する考えや「悲しみ、悲嘆」の反応や表現、「喪」への認識、儀式などは社会的、文化的価値、伝統的考え、信念などに影響も受けると考えられる。特に、わが国では子どもと「死」について話すことは一般的とはいえない状況であるといわれてきたことを考えたとき、「死」について親や子の認識を含めた研究が系統的に進められる必要がある。

そこで、今回は先に述べた親を対象とした子どもと死について語ることの実態調査結果を踏まえ、子どもが身近な大切な人との死別に出会ったときに、親として子どもに関わったこと、親として感じたこと、考えたことについて死別体験のある子どもをもつ親たちの語りから質的に分析し、その認識を明らかにすることで身近な大切な人と死別する子どもたちへの支援のあり方を考える上での示唆としたい。

## II. 研究目的

本研究は子どもが身近な大切な人との死別に出会ったときに、親として子どもに関わったこと、親として感じたこと、考えたことなど親の体験から生と死に対する認識を明らかにした。

## III. 用語の定義

死別体験：今回は、子どもにとって親、きょうだい、祖父母、友人等、身近で大切な存在である人の死とした。

## IV. 対象および方法

### 1. 研究方法

本研究は、質的帰納的方法により実施した。データ収集は、半構成的面接ガイドを用

いてグループ・インタビューを実施した。グループ・インタビューは、形式的ではないリラックスした雰囲気の中で限定したテーマを討議することにより、率直で日常的会話を作りだし、データを収集することができる。また、テーマに関して参加者の理解、感情、考えをお互いの話の中から引き出すことができ、人々の意見の広がり期待できるといわれている。一方、特定の参加者が語り意見の偏りが生じるという欠点もある。これらを研究者間で共通認識し、研究者がファシリテーターとして臨んだ。

本研究では、個人面接ではなく死別体験のある子どもをもつ親同士が語り合うことで、語りの内容の広がりを目指しグループ・インタビューにより実施した。

### 2. 対象者

本研究に先立ち小学1年から6年の子どもをもつ親を対象に『子どもの「死」に関する体験や子どもと「死」について話すこと』に関する質問紙調査を実施した。本研究の対象者は、質問紙調査に協力した中から死別体験のある子どもをもつ親でインタビュー協力の申し出のあった者から、さらにインタビュー協力の同意が得られた者を対象とした。

### 3. データ収集期間

2008年9月～2009年3月

### 4. データ収集場所およびグループ・インタビューの方法

場所は、AおよびB大学のゼミ室で実施した。4～6名を1グループとして4グループのインタビューを実施した。グループ分けについては、研究協力者が参加可能な日程を調整し、人数の偏りがないように配慮した。1グループ90分前後のインタビューを行った。進行は、研究者が司会となりインタビューの目的および注意事項として正しい答え、間違った答えはないこと、どの話題にも必ず答え

なければならないことはないこと、それぞれの方々が体験を通して考えていること、感じていることを率直に話すことを説明して開始した。

## 5. インタビューガイド

1) 子どもが大切な人との別れの体験に対する親としての関わりについて

- ・子どもには、どのように、いつ話題にしたのか、またはしなかったのか
- ・親として子どもの反応で感じたこと、考えたこと、戸惑ったこと
- ・親として子どもの「生・死」にまつわる話題や考え方で大事にしたいこと

2) 現代社会の中で子どもと「生・死」を取り巻く問題に対して日頃、親として考えていること、感じていることなど、また子どもと「生・死」を語ることに影響を与えていることなど。

## 6. 分析方法

質的帰納的方法による分析を行った。インタビュー内容は、承諾を得てテープに録音し語られた内容を逐語録としてデータとした。データを死別体験、子どもの反応、親の思いや考えなど研究目的から着目し文脈単位でコード化した。コード化したデータを研究者間で意味内容の類似性と相違性から比較分析した。比較分析を繰り返し、抽象度を発展させ概念化し、カテゴリーを抽出した。

## 7. 倫理的配慮

対象者には、調査の主旨、目的、方法、任意参加であること、調査協力を断ることで不利益が生じないこと、また結果は個人が特定されない方法で処理し録音したテープは研究終了時に破棄されること等を記載した書面により説明し同意書を返送して頂いた。また、研究結果は学会等で公表することも明示した。本調査は、研究代表者の所属機関の倫理委員会の承諾を得て実施した。

## V. 結果

### 1. 対象者の背景

協力が得られた10校の公立小学校1～6年生の子どもをもつ養育者に質問紙調査をした。配布数は4,014名、回収数868名（回収率21.6%）で、子どもの死別体験のある親は363名であった。今回の対象者はその中で協力が得られた19名で父親4名、母親15名であった。年齢は30歳から50歳代であった。死別時の子どもの年齢は5歳から12歳で、子どもの死別体験の対象者は、祖父母あるいはきょうだいであった。

### 2. 死別体験のある子どもをもつ親の生と死に対する認識

研究目的から分析した結果、以下の8つのカテゴリーが抽出された。

死別体験をした子どもをもつ親は、【死別体験による子どもの反応への戸惑い】を感じながらも【死別体験による子どもの言動の変化】を認識し、【子どもの“死”への理解の深まりを実感】していた。一方で、親自身が大切な人を亡くした当事者であるために【子どもの悲しみを共有できなかった申しわけなさ】を感じ、自分の幼い頃の死への受け止めに想起し【子どもと自分の“死”の受けとめの相違】を感じていた。また、死別体験による子どもの言動の変化から【子どもと“死”を語り合うことの大切さ】を実感すると同時に、【バーチャルな“死”が子どもへ与える影響を危惧】し、【親同士で“死”を語り合うことの難しさ】を実感していた。

次に見出された各カテゴリー【 】について、その内容を表しているデータを「 」で引用し、内容の理解を助けるために（ ）で補足した。また、語りの後ろに子どもの死別対象者と死別時の年齢を補足した。

### 1) 【死別体験による子どもの反応への戸惑い】

このカテゴリーは、親の立場から見て身近な人と死別を経験した子どもの反応が冷静であったり、ショックが大きかったりなど、その反応に戸惑ったことを表現していた。

「意外と事実を伝えても受けとめたっていう印象があるんですね。愛情がないわけではないと思うんですけど。大人が思うほど何か取り乱す様子もなく結構平然とした、しっかり受け止めたのかしら？って、逆に思ったんです。」祖母の死、10歳

「1歳から幼稚園に上がるまで私の母に育ててもらったので長男にとってはかけがえのない育ての親なんです。ショックが大きかったようで、本当に亡くなったときも号泣ですね。悲しすぎてお骨も拾えない状態でした。」祖母の死、11歳

「闘病生活をずっと見ていましたし、本当にびっくりするくらい冷静だったんですね。淡々と骨を拾うときも本当に嫌がらずにやってくれましたし、この子、現実わかっているのかな？って、いうくらい自然に受け止めてくれた。」弟の死、10歳

### 2) 【死別体験による子どもの言動の変化】

これは、子どもが身近な人との死別後、死者を労る行動をしたり、同じ立場の友人を思いやったりなど言動が変化したことを表現していた。

「お爺ちゃんが好きだった物を食べたりすると、まず仏壇にとか…何か買ってくれば仏壇に持って行ったりとか、一緒に共有しようという気持ちが強いんだなって思いました。」祖父母の死、7歳、9歳

「よく“死んでやる！”とか言っていたんです。でも、私の父の死を目の当たりにしてから本人、すごく変わったんですね。母の介護もずっと見てきて死をいうことが、実際に目を動かしたり、手を動かしたりしていた人間が次の日にはもう。それを目の当たりにしたと

きに本人が変わったと思います。」祖父の死、8歳

「お母さんを亡くしたお友達が自分の父親に言えないことも友達（息子）に言っていたようで、長男も色々感じていたみたいで前（祖母の死の体験以前）よりも優しくなったような気がします。」祖母の死、10歳

「お爺ちゃんを亡くした子がこみ上げて泣いた時にクラスで笑うような空気があって、息子は“嫌だった。なんで彼の気持ち汲んであげないんだ”って。息子も祖母を亡くした後だったので、彼がどんな気持ちで涙が出てきたのか、きっと息子なりにわかったと思います。」祖母の死、9歳

### 3) 【子どもの“死”への理解の深まりを実感】

これは、子どもが死別体験をしたことで死への理解を深めていることを子どもの言動から実感し語っていた。

「テレビとか見て“死んじゃったら何もできないのに！どうしてそういうこと（自殺）するんだろう。もう、お葬式は嫌だ”って誰かが亡くなった後、悲しい思いをする、それはもう嫌だというのは本心じゃないかと思いました。」祖母の死、9歳

「クラスで親を亡くした子がいた時、“みんなお葬式に行くって言わないんだよね。ちゃんとお別れしないと、もうできないのにな。私は行く”って。すごく大事なお別れ場面がお葬式という位置づけが子どもにはあるんだなって思いました。」祖母の死、10歳

「ウサギが死んじゃった時、息子は学校に行かなきゃいけないのにお墓を作ろうって。お母さん一人で掘るのは大変だからって。最期まで責任をもつとか、労るとか死んだ父や母が教えてくれたんだなってその時に思いました。」祖父母の死、7歳、9歳

#### 4) 【子どもの悲しみを共有できなかった申しわけなさ】

これは、子どもが死別体験する一方で親自身も大切な人を亡くした当事者であるために子どもの悲しみを共有する余裕がなかった申しわけなさを語った内容であった。

「一人娘だったので、私も気が張って泣けなかったんですけど息子も泣かなかったんです。(母親の葬儀終了後)一週間くらいたって、じっくり話をすると“お母さんが泣いていないのに僕は泣けない”って。その言葉を聞いた時すごく胸が熱くなって“ごめんね”って。子どもを見てあげれば良かったんですけど自分のことで一杯一杯だったって思いました。」祖母の死、8歳

「私も母親の葬式なのに、何故ゆっくり泣かせてもらえないんだろうって、その辛さはあったんですよね。自分も子どもをきちんと見てあげられなかった部分もあったので、お骨を拾うとき、(息子の号泣する姿を見て)こんなに苦しんでいたんだなって、母親として不十分だったって思いました。」祖母の死、10歳

#### 5) 【子どもと自分の“死”の受けとめの相違】

これは、幼い頃の親自身の死別体験による死への受けとめと、子どもの死別体験による受けとめの違いを表現していた。

「私が小さい時、お爺ちゃんを亡くした時恐かったんですよね。お骨を拾うとか、祭壇とか恐かった印象があるんですけど、子どもは生活の中に毎月のお参りとかあるので自然と受け入れてくれたかな?と思います。」祖父の死、6歳

「死に対して、私は恐かった。お爺ちゃんが徐々に弱って行って死んじゃう人なんだなあって思うと恐くてその気持ちを人に言えなくて。でも、子どもは怖がってはいなくて。主人がお爺ちゃんは働き者だから、お空の神様がお爺ちゃんを頼りに連れて行った…という話をして安心感があったようで。私は父の死

をきっかけに死に対する怖さが薄れた。娘の姿から死んでも側にいる感じがわかった気持ちです。」祖父の死、5歳

#### 6) 【子どもと“死”を語り合うことの大切さ】

これは、日々の子どもの関わりから日常生活の中で子どもと“死”について語り合うことの大切さを表現していた。

「一緒にお風呂に入りながら“どうして人って死ぬんだろう”と聞かれたときに、人間、いつかは死ぬ時があるんだよと…。 “婆ちゃんが死んだの見ただろう”って。現実として受けとめて生きて行かなきゃダメだよって、今度はお前が生きなきゃいけないんだよって話します。」祖母の死、8歳

「僕がラーメン食べているとき」という絵本があるんですけど、二人で読んでいて、僕がラーメン食べているとき、僕がサッカーしているとき…って、ずーと続くんですけど最後は、僕がラーメン食べているとき砂漠で小さな子どもが死んでいるで終わるんです。そのページをめくるとき“キューン”という顔を子どもが一瞬したから、あっ、わかったんだって。死の伝え方とか、命の尊さの伝え方はちょっとした本だったり、いろいろな伝え方というのがあるし、自分の生活の中で伝えていくことが大切だって思います。」祖父の死、5歳

「友達のお母さんが亡くなって、家族の大変な状況を見て(息子は)改めて、実感したみたいです。一つの命を奪うことは、そのまわりの家族の心と命まで奪うことなんだよって、教えています。」祖母の死、7歳

#### 7) 【バーチャルな“死”が子どもへ与える影響を危惧】

これは、テレビやゲームなど死んでも生き返るバーチャルな“死”が子どもに与える影響を危惧する内容を語った。

「毎日、毎日ドラマとかゲームでも殺人事件だとか殺すが多いじゃないですか。簡単に殺

人とかドラマでも捉えていいのか？って、疑問はあります。現実を受けとめられない子どもを見ると、どう思うだろう…って」祖母の死、6歳

「ゲームが大好きなんですよね。“死ね”とか“殺す”とか…真剣にやっている。そう簡単に言うものじゃないって教えるんですけど意識なく、すぐに出ていますね…。」祖母の死、8歳

### 8) 【親同士で“死”を語り合うことの難しさ】

これは、子どものクラスメートの親同士が死に対する考えや経験が違うことから、互いに“死”を語り合うことの難しさを表現していた。

「命の授業とか“今はいいんじゃない”って言う人（親）もいます。この子は（死別を）経験しているから（命の尊さを）わかっていて、この子は経験していないから軽んじてしまう…は、おかしいので歩み寄って話をしたいと思いますが難しい。」祖母の死、9歳

「お参りとか、お墓参りをするとか、年配の方（親）でも経験のない人は全くわかりません！という感じで本当に経験の差でわからないんですね。」祖母の死、10歳

## VI. 考察

### 1. 死別体験が子どもの生と死のとりえ方に与える影響

命の教育の骨格を形作るプロセスとして近藤<sup>14)</sup>は、次の3点をあげている。それは、①一人ひとりにとっての「いのちの体験」を子ども自身が正面からとらえること、②その時、誰かがその体験の不安や恐怖やさみしさを「共有」すること、③子ども自身が「棚上げ」する作業を見守り待つこと、である。「いのちの体験」とは、人間の命には限りがあること、自分の存在など無力ではかないものなのだということに気づく瞬間のことであり、日常の様々な出来事をきっかけとして何度も

表れるといわれる<sup>15)</sup>。今回、協力者の子どもたちは、祖父母やきょうだいなど身近な人との「死」を体験し子どもなりに正面から向き合っている状況が親の語りから確認された。そして、側にいた親が様々なかたちで意識的、無意識的に子どもとその体験を共有し、死別体験が子どもの生や死のとりえ方に大きく影響を与えていることを実感していた。

親は死別体験による子どもの反応が、ショックで号泣する一方で、冷静であったり、自然に受け止めている様子から、【死別体験による子どもの反応への戸惑い】を感じていた。大切な人との死別による子どもの反応には感情、行動、身体的反応など多岐にわたり、これらは死別による悲しみ、怒り、罪悪感や自責の念、恐れなどといった複雑な思いとして表れるが、いつもと同じように何事も無かったように振る舞うこともあるといわれる。これは子どもが何も感じていないからではなく、どのように悲しみを表現していいのかわからない反応の一つといわれる<sup>16)</sup>。また、Donna,S.<sup>17)</sup>は、子どもは大人たちがこれ以上つらくならないようにと気遣って何も話さないこともあると述べている。悲嘆反応に影響を与える主な要因としてWorden,J.W.<sup>18)</sup>は、亡くなった人との関係性、愛着の性質、どのように亡くなったか、過去の喪失体験、性別や年齢などパーソナリティの変数、サポートの存在や社会の考え方など社会的変数、連鎖的ストレスの7つをあげている。これらは、子どもの場合も同様と考えるが、子どもの場合、発達段階による認知や思考のレベルによる違いがみられ、大人では考えのつかない意味づけをすることがあるといわれる。今回、親の語った内容からだけでは、子どもと亡くなった人との関係性や愛着の性質等、悲嘆反応に影響を与える要因の詳細を読み取ることは困難である。しかし、一方で10歳、11歳という死の概念理解が現実的、具体的になっていく同年齢においても死別体験による子どもの反応には大きな違いがあること、親の立場

から我が子の反応に戸惑いや疑問を抱くことが確認された。

また、【子どもと自分の“死”の受けとめとの相違】では、親は自分の幼い頃の死別体験による死の受けとめと子どもの受けとめを比較し、その違いを語っていた。前述したように悲嘆反応に影響を与える要因には、過去の喪失体験があり、その人がどのような悲嘆を経験したのか、また未解決の喪失が数世代にわたり現在の喪のプロセスにも影響を与るといわれる<sup>19)</sup>。母親は、自分の死別体験時に抱いた死の怖さを想起し、自分とは違い死を怖がらずに受け入れている子どもの姿に戸惑う一方で、母親自身が意識的、無意識的のうちに死を受け入れている様子が伺えた。

親は子どもが死別体験する一方で親自身も大切な人を亡くした当事者であるために、【子どもと悲しみを共有できなかった申しわけなさ】を語っていた。林<sup>20)</sup>による母親を対象とした家庭における子どもへの悲嘆ケアを検討した報告では、突然の死別に関しては、母親自身も心の準備がないことや、亡くなったという事実に対して否認の心理がはたらくことにより、子どもに事実を話すことに対し、ためらいや戸惑いをもっていると述べている。関係性、親密性の深い人の死は、故人の死を受け入れるという喪失そのものを受容することだけでなく、社会や家庭における新たな役割責任や人間関係の再構築といった社会的適応も求められる。親自身が今まで経験したことのない出来事に対する不安や戸惑いを抱くため子どもの反応や対応への余裕がなくなる状況が推察される。

近藤は、命の体験について子どもが「柵上げ作業を何度も繰り返すことの大切さ」と「大人はいのちの大切さを説くのではなく思いを子どもに伝えること」、「子どもと体験を共有すること」の重要性を指摘している<sup>21)</sup>。今回、「一人娘だったので、私も気が張って泣けなかったんですけど息子も泣かなかったんです。(母親の葬儀終了後)一週間くらいたっ

て、じっくり話をすると“お母さんが泣いていないのに僕は泣けない”って。その言葉を聞いた時すごく胸が熱くなって“ごめんね”って。子どもを見てあげれば良かったんですけど自分のことで一杯一杯だったって思いました」というエピソードは、この重要性を顕著に表わしていた。身近な大切な人の死を通しての親子の共有体験であり、子どもにとって鮮烈な命の体験といえた。母親は、かけがえない母親を亡くし、もう会えないというショックと悲しみ、しかし、しっかり務めを果たさねばという緊張感があったといえる。一方、子どもは、悲しみを堪え気が張り詰めて泣けない母親の姿を目の当たりにして、自分の感情を表出することを我慢していたといえる。そして、葬儀1週間後に互いの思いを表出していた。近藤<sup>22)</sup>は、このような体験の共有から子どもはひとりぼっちではないと安心し、死の不安を「柵上げ」することができ、この「柵上げ」作業を何度も繰り返すことで自尊感情が形成されると述べている。

また、親はお骨を拾うとき号泣する子どもの姿をみてその苦しさに気づけなかった申しわけなさを語っていた。別れの儀式にはその準備や参列を通して喪失の事実を直視し、現実を受けとめられるようになるという意味があるとDana,C.<sup>23)</sup>は述べている。また、Donna,S.<sup>24)</sup>は、子どもの死や死者に対する感情やグリーフ反応は、死の種類や子どもの年齢、亡くなった人との関係などが影響するが、子どもにはどんな感情も自由に表現させ、そのありのままを認めることは、子どもがそうした感情をもつことはいいこと、普通なのだとして認識し感情を表現してもいいと知る助けになると述べている。さらにLehman,D.R.<sup>25)</sup>らは、死別時に感情を表出する機会を持つことが悲嘆のサポートとして有効であると述べている。今回、親と子どもが一緒に葬儀に参列し、子どもがありのままの感情を表出し、お別れの時間と場を共有したことの意義は大きいといえる。

【死別体験による子どもの言動の変化】に表現されているように、親は子どもが死別体験後、亡くなった人を労り仏壇に供え物をしたり、同じ経験をもつ友達へ思いやりを示すなど子どもの言動の変化を認識し、さらに亡くなった人との別れ（葬儀）の大切さや、命の尊さなど死別体験による【子どもの“死”への理解の深まり】を認識していた。これらの内容は、死別体験がネガティブな側面だけではないことを表すものである。東村<sup>26)</sup>は、ガンにより近親者を亡くした遺族を対象に死別体験による人間的成長を質的に分析し報告している。遺族は死別体験により死に対する安心感をもった、自分の死も受け入れたい、死に対する恐れがなくなったなど「死への態度の変化」がみられ、人への思いやり、人に対して優しくありたい、精神的に強くなったなど「自己成長」を認識し、「生への感謝」や「人間関係の再認識」を語っていた。また、石井<sup>27)</sup>は、死別体験をした子どもへのグループサポートを実践的に行い、その事例研究を積み重ね「親やきょうだい、祖父母、あるいは友達を亡くした後、周囲の環境も変わるなかで、子どもたちが何事もなかったように振る舞ったり、攻撃的な行動をしたり様々な反応を示すのは自然なことである。それらの行動の奥に秘められている痛みを周囲の人々が理解し、共感的な対応をすることによって、子どもが死別の痛みを消化し、死別体験を人生の肥やしとして成長していくことができることがわかってきた。」と述べている。今回の親の語りからも身近な人の死は、遺された子どもたちに命の尊さを教えるだけでなく、その悲しみを共有し、思い出を語り合うことで、新たな親子の絆を生みだし、他者への思いやりや生きる力を与えているといえた。また、子どもたちは、確実にその意味を感じとる力を有しているといえた。

## 2. 日常生活で子どもと死を語り合う大切さと難しさ

親が【バーチャルな“死”が子どもへ与える影響を危惧】するように、子どもたちの日常には事件や事故など現実の「死」があり、ゲームの世界での「死」が存在する。一方で、【子どもと“死”を語り合うことの大切さ】に表現されているように、子ども達は、日常生活の様々な出会いや出来事を通して生や死に対する疑問や思いを言葉や行動で親へ発信していた。親もまた子どものサインや言葉を受けとめ、子どもと向き合い、思いや考えを伝えていた。このような親子の関わりが日々の生活で繰り返されることが、「いのちの体験」と「棚上げ」作業を積み重ねることにつながるといえた。「どうして人って死ぬんだろう？」と父親に問いかけた子どもの質問のように、子どもの死に関する疑問や質問は、「死んだらどうなるのか？」、「死んだのは自分のせいなのか？」、「死んだ人はどこへ行くのか？」など子どもの年齢や発達段階により様々である。Dana,C.<sup>28)</sup>は、死に直面した子どもとの関わり方の原則の一つとして、子どもに隠しごとをしないことを挙げている。具体的には子どもに正しい情報を与えることで、大人と子どもと一緒に死の現実に対応でき、日常生活の混乱を鎮められること、子どもの空想や身勝手な理屈を排除でき、悲しみの中からも成長を続けることができる。さらに、沈黙や隠しごとは、ときにその出来事それ自体よりも子どもを傷つけると述べている。子どもの質問は、子どもの思いや考えを知る機会となる。大人が感じていることや考えていることを子どもの理解度に合わせて率直に話し、子どもの疑問に丁寧に答えることが基本といえる。また、林<sup>29)</sup>は、母親は家庭における悲嘆ケアとして日頃からテレビや書物を通して、あるいはきょうだい、友人間の出来事や食事場面、ペットを飼う際亡くなる最後まで責任を持って世話をすることを約束するなど様々な日常生活場面を通して命や死について子ど

もと語り合い、即時的な効果や変化を期待するのではなく、長期的な視野を持って子どもの心の成長を見守っていると報告している。一方で、母親が子どもに死を教えることに困難さを感じている要因として1950年代から1980年代生まれの死をタブー視している時代に育った母親たちにとって死という話題に対して戸惑いが大きいと報告している<sup>30)</sup>。筆者らの死別体験のない子どもをもつ親を対象とした検討においても、親として生と死について子どもと向き合いたい反面、親自身の体験の乏しさ、親同士の繋がりや無さ、情報の多さに戸惑い手探り状態であることが確認された。今回、死別体験をもつ子どもをもつ親は、【親同士で“死”を語り合うことの難しさ】を子どもあるいは親同士の経験の違いから語っていた。

以上、死別体験をした子どもをもつ親は、子どもと死について話す機会をもつことの大切さを感じ、死別体験が子どもの生や死のとりえ方に大きく影響していることを実感していた。一方、メディアから入る情報に子どもたちがどのように影響を受けるか危惧し、親同士で死について語り合うことの難しさも認識していた。

子どもを取り巻く死の問題は、現代社会において決して少なくなっているわけではない。大震災により身近な大切な人を亡くした子どもたちの悲嘆は今もなお続いている。子どもが死別や死の問題に取り残されないように、死別の喪失や悲嘆の問題に子ども自身が向き合うことができるためのあり方とその重要性、その構築に向けた取り組みをさらに発展させていくことが次の課題となる。

子どもは、正面から自分の命を考え、友達や身近な人の死を受け止めている<sup>31)</sup>といわれるように今回の親の語りからも私たち大人が子どもたちの力を信じ、子どもの思いに寄り沿っていく姿勢が何よりも必要といえる。

## VII. おわりに

今回の調査は、一地域を対象とした調査であること、子どもと「死」について話すことへの意識が高い協力者であったことから一般化には限界がある。しかし、親の語りを通して日常生活における様々な出来事から「生きること」「死ぬこと」について、子どもと親が思いや考えを「共有」することの意義が確認された。

## VIII. 謝辞

本研究にあたり調査にご協力頂きました保護者の皆様、また調査実施に際してご協力頂きました小学校の教職員の皆様および関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

本研究は、2007年から2009年度の科学研究費補助金基盤研究C(2)（研究代表者荃津智子）の助成を受けて実施した研究である。なお、本論文は第15回日本臨床死生学会大会（2009.12）で口演発表したものに加筆検討を加えたものである。

## 文献

- 1) Grollman, E.A. 死ぬってどういうこと？子どもに死を語る時、重兼裕子訳、春秋社、1992. p.48-108. Talking About Death.
- 2) Worden, J.W. Children and Grief When A Parent Dies, The Guilford Press, 1996. 18-33.
- 3) Silverman, J.W. Never Too Young to Know, Oxford University Press, 2000. 93-104.
- 4) 小島ひで子. 子ども時代の親と死別後の悲嘆とソーシャルサポート. 臨床死生学. 2004, 9, p.17-24
- 5) 小島ひで子, 白土辰子. 親を喪失した子どもの死別ケア—子どもたちが求めているもの—. 臨床死生学. 2011, 11, p.30-38.
- 6) 石井千賀子, 福山和女, ジェームス・サック. 親を亡くした子どもと家族への家族

- 療法,家族療法研究.2006,23(2),p.43-51
- 7) 石井千賀子,左近リベカ.親を亡くした子どもと家族への総合的グリーフ・サポートプレイセラピーと家族療法を行った事例を通してー.臨床死生学.2008,13,p.91-97.
- 8) 岡田洋子,荃津智子,井上ひとみ他.子どもの「アニミズム・死の概念発達」と生活体験ーDeath Educationの方略を求めてー.平成10~12年度科学研究費補助金基盤(C)(2)研究成果報告書.2001,p.1-129
- 9) 岡田洋子,荃津智子,井上由紀子他. Death Educationのための指針および具体的方略の開発と実践・評価ー小・中学生を対象としたー.平成13~15年度科学研究費補助金基盤(C)(2)研究成果報告書.2004,p.1-61
- 10) 岡田洋子,荃津智子,井上由紀子他.Death Educationのための具体的方略の実践・評価.平成16~18年度科学研究費補助金基盤(C)研究成果報告書.2007,p.1-33
- 11) 荃津智子,岡田洋子,井上由紀子他.小学生を対象としたDeath Educationの実践・評価と課題ー小学4年生の記述内容の分析よりー.天使大学紀要.2005,5,p.1-12.
- 12) 荃津智子,小林千代,井上由紀子他.小学生をもつ親が子どもと「死」について話すことの意識と実態.天使大学紀要,2009,9,p.81-92.
- 13) 村井淳志.“皿いのちをつくる授業”性の授業死の授業.金森俊明,村井淳志編.教育資料出版会,1996,p.198-209.
- 14) 近藤卓.いのちの授業ー学校・家庭における展開ー.思春期学,2003,21(1),p.65-69.
- 15) 近藤卓.“いのちの体験が子どもに生きる意味を教える”死んだ金魚をトイレに流すな「いのちの体験」の共有.集英社新書,2009,p.50.
- 16) 荃津智子,“大切な人の死が子どもに与える影響”グリーフケア死別による悲嘆の援助.高橋聡美編.メジカルフレンド社,2012, p.160-164.
- 17) Donna,L.S.大切な人を亡くした子どもたちを支える35の方法.ダギーセンター全米遺児遺族のためのグループサポートセンター,柴田千春.岩本喜久子訳.厚徳社,2005,p.8.
- 18) Worden,J.W.悲嘆カウンセリング-臨床実践ハンドブック.山本力監訳.上地雄一郎,桑原晴子,濱崎碧訳.誠信書房,2011,p.56-78.Grief Counseling and Grief Therapy.
- 19) 前掲18),p.63.
- 20) 林和江.家庭における子どもの悲嘆ケアの実際ー母親の語りを通してー.臨床死生学.2012,17,p.30-38.
- 21) 前掲15),p.157-164.
- 22) 前掲15),p.156-157.
- 23) Dana,Casrto.あなたは子どもに「死」を教えられますか?空想の死と現実の死.作品社,2002, p.148-168.
- 24) 前掲17),p.16.
- 25) Lehman,D.R.,Ellard,J.H.& Wortman,C.B.Social Support for the Bereaved. Recipients and Providers Perspectives on what is Helpful. Journal of Consulting and Clinical Psychology 54. 1986,p.436-446.
- 26) 東村奈緒美,坂口幸弘,柏木哲夫.死別体験による遺族の人間の成長.死の臨床.2001,24,p.69-74.
- 27) 石井千賀子.大切な人を亡くした子どもたちへのケア.小児看護.2003,26(13),p.1734-1740.
- 28) 前掲23)
- 29) 前掲20)
- 30) 林和江.家庭におけるいのちの教育に対する意識と教育内容の検討ー母親が感じる困難さと実践意欲を比較してー.死の臨床.2010,33,p.120-125
- 31) 細谷良太.小児の死ーケアとエデュケーションー.思春期学.2003,21(1),p.61-64.